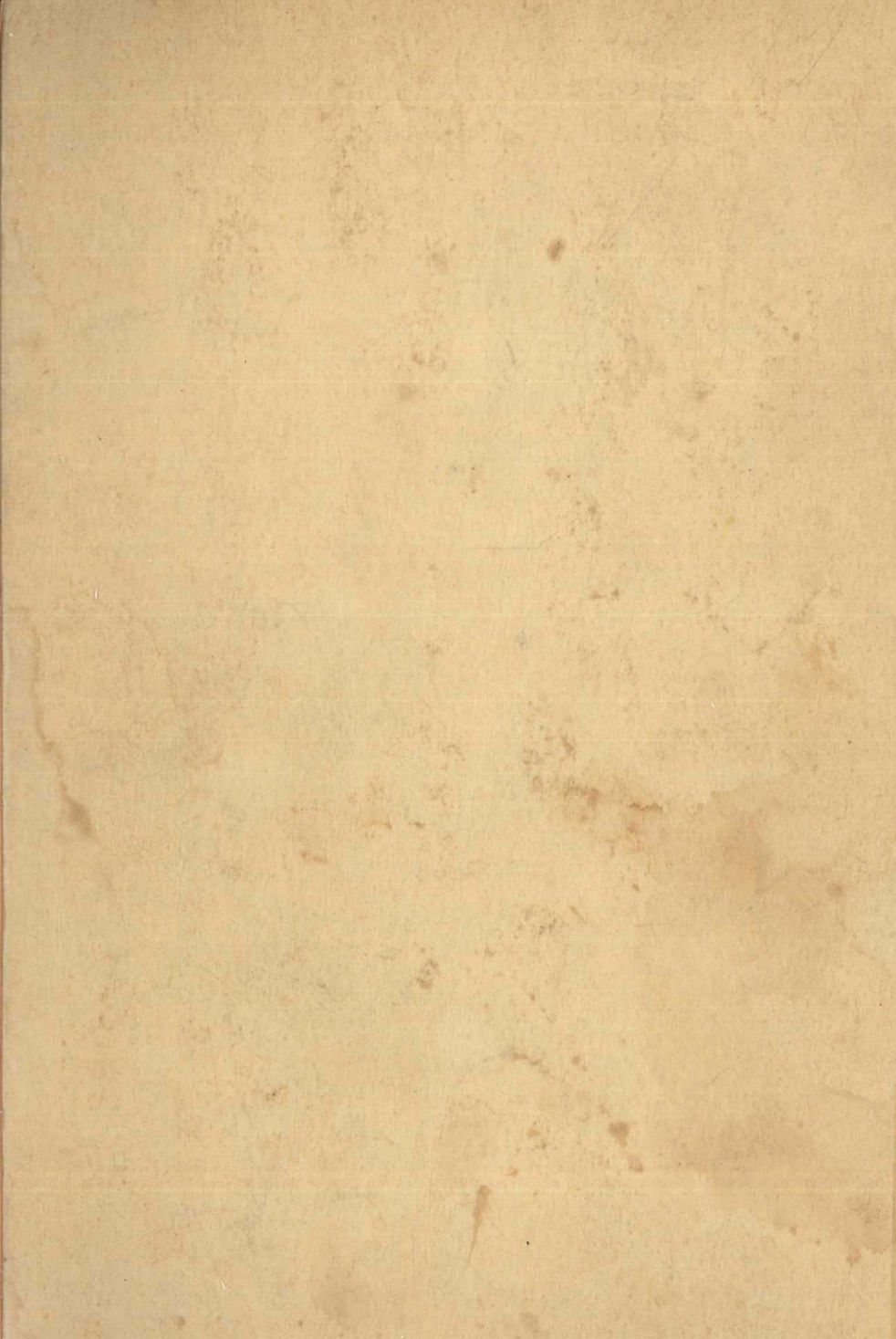




蜜の渴き

岩橋邦枝

実業之日本社

蜜の渴求

昭和四十七年五月一日 初版発行

著者 岩 橋 邦 枝

発行者 増 田 義 彦

発行所 株式会社 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三―(五六二)―四三二一

振替 東京三二六番 一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

書協ビル内

TEL 〇六―(三六三)―一七〇六

印刷 大日本印刷 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えます

蜜の渴き

岩橋邦枝

実業之日本社

目次

花冷え 五

失われた祝杯 三三

蜜の渴き 五九

戯れの夜に 八七

通り魔 一二三

不意の客 一五三

真昼の蜜 一七九

蒼い微笑 二〇七

装幀・さし絵 大歳克衛

花
冷
え

晶子が店へ入っていくと、さきに飲みはじめていた黒川がおだやかな目顔をうなずかせた。同じソファのとなりに、彼女の見知らぬ青年が坐っている。

晶子は、ドアのわきの鏡へ習慣的にちょっと顔をうつしてみながら、黒川のつれを邪魔なものに感じた。この深夜スナックは、黒川と二人きりでくつろぐ場所ときめてあるのに……。

だが黒川は、晶子のかるく咎める眼の色には無頓着な微笑顔で、かたんに二人をひきあわせた。

「京村次郎君。うちの劇団の研究生で、なかなかの勉強家だ。こんど僕の書いた芝居にも、ちょっと出てもらってけるけれどね。こちらは、JNテレビのディレクターの駒井晶子さん」

「京村です、よろしく」

青年は、立上がつて一礼したついでに、機敏に向かい側の椅子へ移った。

晶子は遠慮しないで、彼が空けてくれた黒川の隣へいって腰をおろした。そうする間にも、彼女の職業意識はぬかりなく次郎を観察している。

年齢は、はたちをちょっと過ぎたくらいか、上背のある良い体格の若者。がっちりとした浅黒い容貌で、やや上目づかいに、相手をつよく見つめる眼もとの表情に特徴があった。反

抗的な、傷つきやすい若者といった役どころでテレビでも使えそうだな、と晶子は思った。

京村次郎は、挨拶がすむとすぐテーブル越しに黒川を相手どり、晶子が現われるまえの話題のつづきをはじめた。すねたように顎をひき、着古しのコールテンの上着の肩をいかつく斜めにかまえた姿勢で俳優の主体性がどうのこうの言っている。

晶子は、われ関せずの顔で卓上の酒瓶と氷入れをひきよせ、自分でオン・ザ・ロックをつくった。通勤用のフォルクス・ワーゲンは、局の駐車場に置いたままにしていたから、安心して飲める。

最初のひと口を、サイダーでも飲むようにごくりと喉へながしこんでから、煙草をくわえた。昼間からぶっとおし夜半十二時ちかくまでフィルム編集や次の企画ものに根をつめたあとの、ぐったりした心身には、肩肘張った演劇論議など、うるさいだけである。内容の青くさが耳にひっかかるぶん、ただの騒音よりもしまつがわるかった。

晶子は、ぱっぱっとケントのけむりを次郎の顔の方へふきつけるように、口から吐きちらしていた。まさか、ありふれた新劇役者のたまごから色目をつかわれようとも思わぬが、彼女などそっちのけで一片の気がねも注意もはらおうとしない次郎の態度が、三十二歳の独身女の自尊心にはやはり、かちんとくるのだ。

黒川のこんどの戯曲をしきりにひきあいに出して喋りつづける次郎のようすが、ふと彼女には、テレビ局の廊下などで用もないのにディレクターをつかまえて話しかけるタレント連中の花売込みやゴマすりと同じたぐいにも思えてきた。

にせ革のソファには、若い男の旺盛な体温がまだ残っていて、スカートがあぶらじんでくるようないやな坐り心地だ。黒川のそばの席をゆずるだけのエチケットは心得ながら、さっさとこの場から消えてくれることまではしない青年の半端な氣のきかせかたが、晶子はおかしくもあつた。

「君も、何とか発言してくれよ」

と、黒川が眼尻をすばめて煙草をくゆらせながら、晶子をかえりみた。

彼女は苦笑顔をよこに振った。口をうごかすのもおつくうだった。そのくせ、疲労がしみた軀は妙に鋭敏に感じやすくなっていて、黒川のひげののびかけたざらついた顫顫や、次郎の言葉に頷きながら、ゆっくりと髪をかきあげる長ばそい指を近くに見えているだけで、じいんと腰のほうから熱ばんでくる。

二月いっぱい黒川が戯曲のねり直しや公演仕度に追われたり、晶子の方で忙しくて約束の予定がたたなかったりで、今夜はひと月ぶりでやっと逢えたのだ。

この深夜スナック「ルネ」は、去年の夏のある夜めずらしく晶子が自分の車で黒川を自宅付近まで送っていく途中、なにげなくなち寄って以来、二人のしのび逢いの場所になっていた。

よく店がつぶれないと思うほど常連がすくなく、氣のおけない零開氣が何よりだった。

お互い、仕事のうえでつきあう連中や飲み仲間が多いが、ここへはだれもつれてこない——と口に出してきめたわけでもないけれど、そういうことで来ている。そして、この店のあとは

ホテルへ行くという順序も暗黙のうちに、いつとはなくきまってしまったコースだった。

「ルネ」で逢おう、という約束は、情事の約束の暗号でもあった。

黒川がおとなしい声でひとつひとつ選ぶようにしながら次郎の質問に答えているとき、仕切りの奥から店のマスターが現われた。

「黒川さん、お電話でございます」

黒川は「あ、どうも」と軽く応じて、立っていった。

晶子の視線が、ふっとうさん臭げにとがって、彼の後姿を追った。何故ともなく、気になった。軀でなじんだ相手に対する、本能的な嗅覚だった。

次郎がぼきぼきと指の関節を鳴らしながら呟いた。

「いよいよ、二世誕生かな」

「え？」

晶子は、ぎくつと聞きたがめた。

「何だか、急に今夜になっちゃったらしいですよ。予定日とやらは、まだ先だったんでしょう？　そういうのって、僕によくわからないけど」

黒川の妻のおめでたを、晶子もかねがね知っていたものとして、次郎はそんな答えかたをした。

晶子はもう、声も出なかった。黒川に子供が！　うさん臭さの霧が、さっと切り裂けて、眼

のくらむような事実がのしかかってくる一瞬だった。耳鳴りのむこう側で、次郎ののんきな声がする。

「親になる心境って、僕なんかにはわかんないけど、先生ったら何しろ落着かないんだ。僕はときどき黒川さんのお宅へおじゃまするんですが、今夜は病院からの電話待ちでどうせ何も手につかないから、それまで僕につき合えって……。この店へ来るのも本当は僕、先生に自宅待機を命じられたんだけど、何時間待つ羽目になるかわかんないから僕もいっしょに出てきちゃった。なにも僕にルス番させなくとも、此処へ知らせてもらえばいいわけですからね。やっぱり先生は、今夜は相当あわててるな」

「じゃ、そのことのお電話でしょ、きっと」

と、晶子は言った。悲鳴をあげてのたうちまわる感情とは別人のような、さりげない声と表情だった。

さすがに、どくどくと波うちながら顔へかけのぼる血はおさえきれないが、さいわい酒の酔いのあからみでごまかせる、と彼女は思った。不意打ちに、ぐさっと切りつけられたような衝撃のなかでも、みじめな醜態から自分をまもる意識だけはぴんと張りつめているのだ。男が正式な妻に子供を生ませたからといって、彼につめ寄ってとり乱すことの滑稽さ愚かしさは、晶子自身がいちばんよく知っていた。ましてや、ここは黒川と二人きりの密室ではなかった。

黒川が戻ってきた。晶子は、じいっと手もとのグラスへ眼を伏せていた。

「病院からですか、先生」

「うん。女の子だって」

と、黒川はぼそと言った。

「ブラボオ！ 先生のお望みどおりじゃないですか。やっぱり、奥さんの勘は的中しましたね」
ふだんは、必要な用のほかはいっさい客にたちいらぬ、頭の禿げたマスターまで珍しく出てきて、

「おめでとうございます。さっそく、乾杯ですね」

と、お愛想を言った。

晶子は縛られたように、身じろぎ一つしなかった。頭のなかが麻痺してエアポケットにおちこんだ感じだ。すべてが架空じみてドラマのセットに坐っている心地でもある。彼女の自尊心は、つかのま、武装を忘れた。厳然とした事実をともに喰らって、ぼう然となっていた。

黒川は、立っていったときと同じなげなきで、元の席へ腰をおろした。すると晶子は、演技開始のキューをうけたように、すつとグラスをもちあげて唇へはこんだ。彼が隣へきて坐ったとたん、自分を鎧よろいう意識をとり戻していた。まぢがっても、恨めしそうな涙や、ふるえる手首など見せてなるものかと思う。

花 冷 え
酒は、味も香りもしなかった。ただ、硫酸のように灼けるものが喉から胃の腑へつたい、赤
剩のこけのただれを胸にひろげていく。

黒川は次郎の調子づいた無駄口に、生^なま返事をかえしている。晶子を憚^{はば}っているのはあきらかだった。

何をいまさら、と晶子は云ってやりたかった。出産は、突発事故とはわけがちがう。妻の妊娠のことを、ついぞ仄^はめかしさえしなかった男の心沙汰^{こころざた}が、晶子にはぶきみなのだ。ひどすぎる、と思った。

「先生、お子さんの顔、はやく見たいでしょう。面会時間で、いつですか」

と、次郎がたずねた。

「いや、うちの近くの個人病院だから、夜中でも何でも自由はきくけどね。でも、なにも、そう慌^わてて……」

「それもそうだな。ご臨終^{りんしゅう}つてのところがって、生まれたほうは今後ながあいつきあいだもんな。なにも慌^わててかけつけて、顔あわせることもないですよね」

黒川が、くくつと喉の奥からやわらかい笑声を洩^もらした。

そういう笑いかたは、彼の上機嫌のしるしなのを、晶子も知っている。おもわず彼女は、刺すような眠つきを黒川へ向けた。

どんな深酒でもけっして赭^{あか}くならない彼の顔が、耳のうしろの方までぼおっと上気した色をおかしている。うぶな少年めいてさえ見えた。もう長いこと、晶子はこんなにみずみずしい彼のおもぎしに接していなかった。

彼女は、ぐいと臉を掴^{つか}られた心地だった。たじたじとなった。燠^{あつ}をかきたてるように赤みのさした黒川の横顔は、平静な物腰や生^なま返事の内側で彼があじわっている感動を、あざやかに透かし出していた。それは晶子にとって、彼が手ばなしで浮かれるさまを見せつけられる以上の、残酷な試煉だった。

彼女は、不馴^なれな楽器をためすようにおそるおそる、

「でも、どうかしら」

と、声を出してみてから、自分の尋常な口調に吻^{はづ}としてさきをつづけた。

「やっぱり父親としては、息せききってご対面にいく方がしぜんだわ。その方が、かわいげがあるわよ」

黒川が、ちらっと彼女の方をうかがった。

すかさず彼女はさしのぞいて、

「ね、あたし達にはご遠慮なく、早くいらして。それに、あたし、親になりたての人と飲んでるのって何だか気味わるいわ。飴玉のつもりでしゃぶってたら、かちっと舌ざわりがパチンコ玉に変わっちゃったような感じ。どうも勝手がちがって、おちつけないわ。悪酔いしちゃう」

と、笑いながらすばすば言った。

「少々、ご銘^{めい}酮^{てい}かな」

と、黒川は次郎を見やって、ちょっと無理した感じの苦笑をくわえた。それから、腕組みし

で黙りこんだ。

晶子は、煙草に火をつけた。胸のなかで時限爆弾がカチカチと音をききむ。この気づまりな沈黙があと二、三分もつづいたら、感情の爆発を喰いとめられそうにもない。

唐突に、黒川が腰をあげた。

「じゃ、僕は失敬して……」

「あ、先生やっぱりそうなんです。どうか奥さんに、よろしく」

晶子の隣が、空席になった。

「黒川先生も、いいところあるなあ」

と、次郎がにやにやと頭を掻いた。

晶子は知らん顔のまま、テーブルにこぼれた水をマッチ棒でつきまわした。空きっ腹にながしこんだアルコールが、急にかあつと効いてくる。手足のすみずみまで、火炙りにかかったようだ。

ようやく何かを察して、次郎も黙りこくってしまった。ほかに客のいない真夜中の店内は森閑として、青みがかった照明がいちだと薄ぐらくなつた感じた。

次郎の好奇心のいりまじつたうかがうようなまなざしにいきあうと、晶子は身じろぎしてにっこりと眉をひらいた。

「どうぞ、ご自分でできとうについて召上がつて。氷も炭酸も、お好きなようにね」